

一七一偈とその長行を参照して解釈してみれば、「妄語(mr̥ṣā vada)によって僧が教団を破壊するのは、もろもろの業において最も重罪(mahā-sāvadya)である。」とされる。このように妄語によって教団が破壊される。教団を破壊するとはどのようなことであるのか。『雑心論』一七一偈の長行によれば、「仏法を重要視せず、正法で広く教え導き転じさせず、大衆を悩ませ乱す。」(法身仏所重。以彼広方便転故。壞僧者悩乱大衆故。大正二八・八九九・中一六一一七)とされる。『俱舍論』で『雑心論』の相応するのは、業品一〇七偈とその長行(大正二九・九四・中二一一五)である。この漢本に相当するプラダン本の梵文(LAK)は、二六四頁二行以下である。また梵文『称友疏』(萩原本『AKV』)では四三〇頁五行以下である。『俱舍論』漢本と梵本とも『雑心論』と相違しない。又、心論系論書である『心論』と『心論経』も同じく『雑心論』と相違しない。ただ『心論経』には壞僧について二種があるとして『雑心論』に述べられていないことを明かす。その二種とは「仏の教えを壊して別の集団を作る。二つは仏の決めた作法を壊す。」(有二種破僧。謂破法輪及破羯磨。大正二八・八四三・下一六一一七)とされる。

壞僧の体について『雑心論』一七一偈では述べられていないが、一六六偈に「謂く不和合の性なり。當に知るべし、是れ壞僧なり。」(大正二八・八九八・下一八一三二)と。壞僧の体は不和合の性であるとしている。心論系論書である『心論』『心論経』には述べられていないが、『俱舍論』『順正理論』では『雑心論』と同様に述べられている。

妄語・虚誑語によって教団を破する僧を壞僧と言うのであるが、ここで壞僧が行為する虚誑語について述べてみたい。虚誑語の定義は『長阿含』『衆集経』(大正一・五〇・中)に、「見・聞・覺・知された事実に対して、その通り話すことが聖言であり、事実を枉げて話すことが非聖言(anarīyavahara)である。非聖言こそ虚誑語である。」と。これに解説をしたのが世親と衆賢であった(大正『順正』四二・大正二九・五七九・上)。又その中で虚誑語と業道成就について、「虚誑語を發する者が異想し發言し更に所誑者(相手)が、能解(abhiñā samā-ttha)・その表面上の意味だけを取り、それに動かされて自分の心を誤りなく染心するに至る。その時虚誑語を發言した者が業道を成就する。」と。(大正『俱舍』一六・二九・中、『称友疏』、萩原本『AKV』)では四〇六頁)以上のことから語業である虚誑語の業道成立の条件は三つあると考えられる。一、染心を持つている。二、異想し發言する。三、義を解する。虚誑語を行為する僧の特色は慚愧がないことであろう。慚愧が生じたならば善を生じることも可能であろう。譬喩者は「無間業可転」を主張したとされる。破和合僧のような重大な悪業であっても、可転・転換することが出来るのではなからうか。

#### 無表業の相統問題

日比 佑香

業の問題は、仏教教理の最たる重要課題であり、『阿毘達磨俱舍論』(AKBh.)でも最も重要とされているテーマである。そこには、我々が存在する世界とは、自らが過去に為した業に

よって自らが果報を受け、その果報に依って生じたものに他ならないということが説かれているのである。

従来では、この問題は特に説一切有部におけるインド思想で暗に示される輪廻思想に付随して考察され、業の相続によって輪廻転生が果たされるとされてきたが、近年では「有部では表業・無表業を肉体の四大種に依止するものと立てるから死とともに捨す」とされているし、実際にそのような記述が *AKBh.* において見られる。すなわち、業は輪廻して相続せず、肉体が減ぶとともに捨せられるというのである。これは業が身体の構成要素である四大種を拠り所とすることを根拠としての主張である。

しかしながら、*AKBh.* 世間品においては、現在存在している身体である本有だけでなく、死後の魂である中有の体もが五取蘊であるとされ、輪廻は業と煩惱の拠り所となる蘊によってなされるとかかれていることや、あるいは、「業果の相続」は異熟因異熟果により成立するとされている。ここに、中有の四大種を所依にできるのではないか、また、異熟因が果を結ぶ際に今生の身体を亡くしていれば、その主体となるものを業以外の如何なるものを所依とすることができるのか、といった疑問が生じた。本発表では、無表業の輪廻性に関する考察を中心に、*AKBh.* を中心とする無表業に関する論述をまとめた。

まず共通の認識としては *AKBh.* 界品によると、無表色は色蘊 (*rūpa-skandha*) のなかに分類される。また、それは四大種によってあるものである。そして、色 (*rūpa*) と作用 (*krīyā*) の自性を有すが、表業のように他に知らしめることができない

ために認識されないのが無表業であるとされ、さらに、定より生じる無表には形がなく、心心所の所依の体とは結びつかない」とされる一方で、散地の無表は、表業とともに生じ、身体を離れないとされた。そして、有部は無表業実有の八証を列挙してその実有性を主張した。これに対して経量部は無表業の非実在性を主張し、無表の非色性を主張した。

世親はこのうち、経量部的な立場に立ちながらも、さらに蘊相続の非実在性を『雜阿含經』の一節を引用することにより証明しようとした。そこには、「第一義空義とは俗数法を除く」と書かれているからである。

しかしながら、『増一阿含經』の一節に、「因縁は仮号であり、因と縁の合会こそが第一義空義である」と述べられていたため、世親の挙げた蘊相続の非実有性の根拠とするにはふさわしくない可能性があることが分かるとともに、世親が蘊相続の非実在性を説いて、輪廻相続の問題を思種子の相続へと結びつけて五蘊相続から離れる説を支持していたことが窺い知れた。さらに、世間品において有情の輪廻が否定されず、煩惱と業とによって果たされるものであると規定されたため、たとえ表業・無表業が死とともに謝滅するという記述があるとしても、業は残るものであることに相違ないであろう。

#### 『大乘莊嚴經論』菩提品の成立について

田口 惠敬

本稿は、『大乘莊嚴經論』(以下、*MSA*) IX章菩提品と『撰大乘論』(以下、*MS*) X章彼果智分の四智説と三身説の記述内